

真摯な迫力で造る 構造家・徐 光

朝倉幸子◎TH-1

illustration:Taco◎Switch・エンタテインメント

■No.800の重み

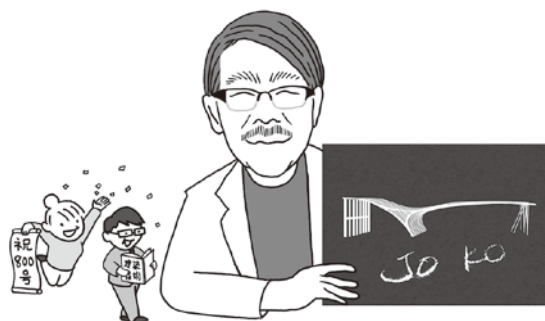
徐光さんが構造設計された「秩父看護専門学校」が、本誌1998年5月号（No.579）に掲載されている。その記事の最後に、同じ倉田裕之／建築・計画事務所の家匠設計で「大空間に応じたデザインの自動車ショールーム」の模型写真も載った。それから18年、本誌「建築技術」の今月号は通巻No.800。

徐光さんは、建築されなかったこの建物を、覇志堂が掲載してくれたことを忘れていない。そして、まるでたった今設計し終わったかのように、熱く説く。覇志堂も、その模型に表現された構造の美しさに、今も共鳴する。立場は違っても、お互いの構造建築に対する想いを感じ合ってきた。異国から来て、構造設計界を真摯に生きてきた徐光さんは、800号の重みを覇志堂とともに語ることのできる構造家です。

■日本構造界への本気

「僕は、1988年に中国から来ました。死ぬまで一緒に仕事をしようと思っていた勤め先の社長を振り切ったね。SDGにいたアニキが、優秀な弟がいたら、渡辺邦夫先生にお願いして日本に呼んだのです」資料が集積された所長室で、徐光さんは続ける。SDGの面接は先生の前で、幕張メッセの鉄骨製作図のチェック。そこから日本での技術者としての新たな人生。「最初は、日本語をひとつもわからなかった」。だから、職人とは、絵を描いて打合せしたという。日本語は、すべて仕事のなかで。「みんなが先生でした」という。優れた頭脳と努力、何より必死だったろう。故国を後に、妻と子を伴っての覚悟の移住だったはずだから。力強く中身の濃い話が、抑揚のあるイントネーションで和らぐのでした。

現在、沢山のプロジェクトを抱え、率いる10名余りの技術スタッフはフル活動。独自の世界観をもつボスの元で大丈夫？の心配は無用のよう。開放された



扉越しに、明るい声が聞こえてくる。技術と人物のスケールは比例しているようです。

■メッセージを胸に

徐光さんは、師の構造家・渡辺邦夫が書いた一文を大切にしている。弟子への尊敬の念も読み取れる、率直な文章だ。「彼は中国・上海市出身の構造設計者である。すでに上海市で構造技術を駆使した設計や施工で活躍していた技術者であるが、経済開放の初期の頃に混乱した中国建築界を離れ、SDGにやってきた。徐光は上海でPC工場の責任者をやったり、鉄骨の製作にまで従事したことがあり自分で溶接もできる。僕たちのような机上での訓練とは違い実践での経験があるから、彼の描く図面には迫力があるし、監理は厳密で一切の妥協をしない。僕は彼の技術に対する真摯な姿勢に敬服していた」そして、「彼も妙に僕の構造デザインに対する考え方に信頼をおいてくれた」と続く。構造デザインを、徐光さんに知らしめたSDG。徐光さんが立ち上げたJSDという社名にも師弟関係が表れているのです。

■高松の丸亀町に「森」

全長160mの圧倒的な空間性のあるデザイン。構造と意匠と材料の特性を融合させて、高松市丸亀町のアーケードを設計した。実際に行ってみると、確かに昼の「森」と夜の「森」を体験したのです。

徐光さんの頭脳が直接手に伝わっているような数あるスケッチ。湧き出るデザインセンスが、確実に裏付けされた技術によって具現化する。

「渡辺邦夫先生に構造デザインを学びました。今、僕があるのは先生のおかげです」といい切る徐光さん。時を得て、これからさらに活躍されるだろう構造家。大きく建築を見据えた姿があります。